

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	明の張梅村（守約）『擬寒山詩』について
Author(s)	鈴木, 敏雄
Citation	中國中世文學研究 , 72 : 18 - 31
Issue Date	2019-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047686">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047686</a>
Right	
Relation	



# 明の張梅村（守約）『擬寒山詩』について

鈴木敏雄

一 清の沈季友『橋李詩繫』（四庫全書）所収）卷十三「張布衣守約」に、明の橋李（嘉興府）のひと張梅村（守約）の略伝、およびその「和山居詩」二首が採録されている。

守約、號梅村、秀水芝溪人。不事詩書、以耕桑爲業。耽心禪理、有得、輒能吟咏。陸莊簡與之交。有「和寒山詩」一卷。嚴滄浪云「詩有別才」、于梅村信之。

（守約は、梅村と号し、秀水芝溪の人なり。詩書を事とせず、耕桑を以て業と爲す。心を禪理に耽り、得る有れば、輒ち能く吟咏す。陸莊簡これと交はる。「和寒山詩」一卷有り。嚴滄浪「詩に別才有り」と云ふは、梅村に于いて之を信ず。）

「和山居詩」二首

遁居霞霧峰、千山萬山裏。白雲傍榻飛、草閣依巖起。閑臥擁鹿裘、清談揮塵尾。童子採茶歸、自去汲泉水。

山空宿鳥鳴、磴道臥松影。涼月夜淒淒、明河秋耿耿。

歌。長歌復短吟、來往無人境。疎鬢不堪搔、絺衣風露冷。

この「和山居詩」二首の「和」とは、他でもないこの略伝中という「和寒山詩」一卷（三百首）の「和」であり、「和山居詩」とは、唐の「寒山詩」三百余首中の山居詠のうちの二首に和したものであることを意味する。

その張守約（梅村居士）『和寒山詩』（すなわち『擬寒山詩』三百首は、明代に「梅村居士張守約追擬、五臺居士陸光祖訂正」と署して上梓されている。これを最終的に修訂し、上梓したのは、この略伝中にも見えるパトリックの陸莊簡公（五台居士こと陸光祖、字は与繩、嘉興府平湖の人、一五二一〜一五九七）であるので、右掲の『橋李詩繫』所収の「和山居詩」二首は、清の沈季友が採録の際に新たに附した詩題であって、もとより陸光祖の言う『擬寒山詩』三百首からの抄録二首であると見て好いと思われる（以下、張梅村『擬寒山詩』三百首の各首に、その集の配列順に番号を付することとし<sup>[1]</sup>、右掲其一の「遁居霞霧峰」詩は009、其二の「山空宿鳥鳴」詩は101<sup>[2]</sup>とした）。

すなわち、沈季友は梅村『擬寒山詩』三百首中の、殊に「山居」詠を高く評価し採録したことになる。梅村の三百首中には、山居詠が五十首ほど有るので、寒山詩の中からその山居詠に擬した「擬山居」詠こそが梅村詩の評価に相応しいと看做したものと考えられる<sup>[3]</sup>。

その際、「和」か「擬」かは、梅村『擬寒山詩』上梓の際に、陸五台（莊簡）が「梅村居士張守約追擬」と署している点に鑑み、寒山詩への「追擬」であると看做したい。「擬」詩であれば、「和」詩の唱和とはまた異なる読みを要する。すなわち、張梅村『擬寒山詩』三百首は、多くを「山居」詠が占めてはいるものの、「追擬」という意図が働いている以上、先ずは各首の模倣対象がそれぞれ「寒山詩」の中に在り、その原詩が特定され、しかる後に、それがどのように擬作され、各首の模倣意図、もしくは制作意図が働いているのかを見る必要があると考へる。

本稿では、張梅村『擬寒山詩』三百首の「追擬」が、如何になされているかについて述べてみたい。

## 二

梅村『擬寒山詩』三百首が、寒山詩に「擬」したものであること、及びその制作（擬作）には意図が働いていることについては、他でもない、その自序（「擬寒山詩自叙」）に既に明言されている。

寒山子詩以及慈受諸公擬寒山詩、皆所以歌詠性靈、

闡揚道妙、欲使衆生去妄歸真、舍凡入聖、厥旨微矣。但多提唱宗乘、罕看及乎淨土。故約以爲釋迦文佛入滅之後、正法五百年、持戒堅固、像法千季、禪定堅固、末法萬年、念佛堅固、而今故末法時也。

予山居多暇、間爲擬寒山詩、要在勸人念佛、往生樂國、橫出三界、永斷輪廻、次則啓人戒殺放生、長養慈心、以爲生方津筏。至若山居賦事咏物等作、敢以發寒山慈受諸公之逸響、少裨寒山慈受諸公之法施、殆所謂覆坏土於泰山、添勺水於滄海、不自諒哉。冀覽者或另着眼、則狗尾蛇足之誚、庶幾其少寬耳。

（寒山子の詩<sup>お</sup>及び慈受諸公の「擬寒山詩」は、皆に性靈を歌詠し、道妙を闡揚し、衆生をして妄を去つて真に帰し、凡を捨てて聖に入らしめんと欲する所以にして、厥の旨は微なり。但だ宗乘を提唱すること多く、淨土に及ぶを看ること罕れなるのみ。故に約<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>以<sup>て</sup>へらく釈迦文仏入滅の後、正法五百年は、持戒堅固、像法千季は、禪定堅固、末法万年は、念佛堅固にして、而して今は故より末法の時なりと。

予山居して暇多く、間ま「擬寒山詩」を爲すは、要は人に念仏を勧め、樂國に往生し、横いままに三界を出で、永く輪廻を断たしめ、次なるは則ち人を啓きて殺すを戒め生を放ち、長く慈心を養ひ、以て生方の津筏と爲さしむるに在り。山居・賦事・詠物等の作のごときに至つては、敢て以て寒山・慈受諸公の逸響を發し、少らく寒山・慈受諸公の法施<sup>お</sup>を裨

へば、殆ど所謂の坏土を泰山に覆ひ、勺水を滄海に添ふるにして、自らを諒さざらんや。冀はくは覽る者或は別に着眼し、則ち狗尾蛇足の誇り、庶幾はくは其れ少く寛ざるのみならんことを。」

梅村は、今は釈迦入滅後二千年が経ち、その教えと実践と悟りのうち、教えのみの残る末法の世ゆえ、人々には「念仏、浄土(浄土往生)」を勧める必要があるとする。そしてそのためには、たとえ蛇足の誇りを被ろうとも、どうしてもそれ以前の釈迦の教え、実践のこのる像法の世に於いて「禪定」を堅固にした寒山詩に真似(その逸響を発して、その法施を禪(ひ)、寒山自身およびその「擬寒山詩」(偈)を物した宋の慈受和尚らの主旨を今の人々に伝える必要がある、とする<sup>3)</sup>)。その際、寒山らの詩偈は「宗乗」すなわち教えのみを伝えているかに見えるので、それに関して「往生楽国」(浄土往生)の旨を補いたいと加える。

すなわち梅村『擬寒山詩』は、像法禪定の世の寒山が宗乗を詠んだ詩偈を末法念仏の今に持ち出し、楽国往生、出三界、断輪廻、戒殺生等が人々に伝わるよう詠み直して見せ、衆生を救済したいとの意図が働いている。

なお、湖州府烏程のひと文人居士の蔡善繼は梅村『擬寒山詩』に序を寄せ(「梅村居士擬寒山詩序」)、次のように言う<sup>4)</sup>。

寒山詩非詩也。無意於詩而似詩、故謂之寒山詩。

梅村居士擬寒山詩若干首、警醒世迷、發明大道、聲

響意象、無非似寒山者。以無意於寒山、故能似寒山也。

居士素工詩、老而逾妙、笥中藁計不下數千篇、爲李爲杜、爲王爲孟、爲陶爲謝、靡不各極其致。至所擬寒山詩、則又若歌若嘯、摩寫人情物態、爽豁痛快、讀之令人鼓掌頓足、心神爲開、而毛髮爲豎、有味乎言之也。

夫寒山子示跡污穢、而獨以吟詠留題巖谷、傳布街衢里井之間。居士沈冥當世、篋中之藏幾爲韞櫝、而獨以是編付諸副墨之子、假剞劂以公同志、而示人意、可想而知已。

嗟嗟、濁世不可莊語、故曼衍以窮年、高言不止於衆人之耳、則淺言以見意。世之人以詩道求居士、是編何足以盡詩。居士之詩、則固爲李爲杜、爲王孟爲陶謝、自足稱雄、詞林上下千古、恨世莫得而盡見之耳。

乃余之知居士、則未始以詩。居士棲心禪那數十年、究竟最上一乘之旨、疑是龐老後身、即列諸高士傳、彼似有所不屑。世之讀居士詩、宜想見其人、并求其意、焉可也。

福山同社本明居士蔡善繼

(寒山詩は詩に非ざるなり。詩を意(おも)無くして詩に似たり、故に之を寒山詩と謂ふ。梅村居士の「擬寒山詩」若干首は、世迷を警醒し、大道を發明すれば、聲響意象、寒山に似るに非ざる者無し。寒山を意(おも)ふ

無きを以てす、故に能く寒山に似たるなり<sup>5)</sup>。

居士は素より詩に工みにして、老いて逾いよ妙、笥中の藁は計ふるに数千篇を下らず、李と為し杜と為し、王と為し孟と為し、陶と為し謝と為し、各おの其の致を極めざる靡し。寒山に擬する所の詩に至つては、則ち又た歌ふがごとく嘯くがごとく、人情物態を摩写して、爽豁痛快、之を読めば人をして鼓掌頓足せしめ、心神為に開き、而して毛髮為に豎てば、味はひ有るかな之を言ふや。

夫れ寒山子は跡を汚穢に示し、而して独り吟詠して題を岩谷に留むるを以て、街衢里井の間に伝布す。居士は当世に沈冥すれば、篋中の藏するは幾ど為に韞櫝に韞まるも、而も独り是の編をのみ以て諸を副墨の子に付し、剞劂を仮りて以て同志に公にすれば、人に示すの意、想ひて知るべきのみ<sup>6)</sup>。

あゝ、濁世は莊語すべからず、故に曼衍として以て年を窮め、高言は衆人の耳に止まらざれば、則ち浅言以て意を見はず。世の人詩道を以て居士に求むるも、是の編何ぞ以て詩たるを尽くすに足らんや。居士の詩は、則ち固より李と為し杜と為し、王孟と為し、陶謝と為して、自ら雄と称するに足るも、詞林は千古に上下すれば、世の得て尽くは之を見る莫きを恨むのみ。

乃ち余の居士を知るは、則ち未だ始めよりは詩を以てせず。居士は心を禪那に棲まはすること数十年、

究竟最上の一乗の旨は、是れ龐老の後身かと疑はれ、即ち諸を高士伝に列するも、彼には屑しとせざる所有るに似たり。世の居士の詩を読むは、宜しく其人を想ひ見、並びに其の意を求むべくして、焉に可なり。福山同社本明居士蔡善繼)

これに拠れば、梅村『擬寒山詩』はそこに「詩道」すなわち詩に関する主張を求めるのではなく、寒山の詩偈に求めるのと同様、世人の迷いを醒まし大道を明らかにしようとするその「人」とその「意」をこそ汲み取るべきであつて、そのためには梅村最上の一乗の禪那を知る必要があると云う。ここからも、明言こそされないが、意図が衆生の救済に在ると見られていることは分かる。そして、その禪那生活に現れる寒山を真似た梅村の「人」と「意」とが、その意図を実現するための手法として働いているであろうことも見えてくる。

ただしこの蔡善繼は、張梅村という人はその「人」と「意」が寒山の禪那生活にそっくりなのかと言えば、確かに寒山同様に長年「禪棲」に徹してはいるものの、むしろ禪僧として明代に評価の高い、寒山と同時代のひと龐蘊居士に似ている、と見る<sup>7)</sup>。

すなわち蔡善繼は、擬作(348)に「修行得心田、無如錢最惡。……龐老沉之江、君休入水摸。……」(修行して心田を得るは、錢の最悪なるに如くは無し。……龐老は之を江に沈むれば、君入水して摸るを休めよ。……)と詠み、修行に当たって最初に錢財という最悪の煩惱を捨

て、一つの心田(「一心一乘」)を得たという龐蘊のよう  
でなくてはならないと説く張梅村と、「十方世界一乘同、  
無相法身豈有二。若捨煩惱入菩提、不知何方有佛地」(十  
方世界は一乘同し、無相の法身豈に二有らんや。もし煩  
悩を捨てて菩提に入れば、何方に仏地有るかを知らず)  
と自らの偈に詠んで、煩惱を捨てて二無しを追究した龐  
蘊とが似ていると見、評価しているものと思われる。仏  
教者としての梅村は、寒山にも増してそのような一乗を  
求める意が濃いと、蔡善継は見ているのではないか。  
以下、張梅村が寒山による像法の救済を末法の世に適  
用させるために如何に「寒山詩」に類似させているのか  
(自己表現のためにも「寒山詩」をどのように用いてい  
るのか)、寒山の原詩と比べながら、具体的に見て行き  
たい。

### 三

梅村『擬寒山詩』三百首は、先ず、冒頭の四首が序文  
さながら、最後尾の一首が跋文さながらに編まれている。  
最後尾の一首を見ると、次のように詠む。

春寒風雨多 春寒くして風雨多く  
谷冥煙雲亂 谷冥くして煙雲乱る  
緬念貧屋人 緬かに念ふ貧屋の人  
何心弄筆硯 何の心か筆硯を弄する  
偶然檢藥方 偶然薬方を檢するに  
吟草亡失半 吟草亡失すること半ばなり

也不求諧律 また律に諧ふを求めず  
但欲勸世人 但だ世人に勸めんと欲し  
偶尔盈紙筆 偶爾として紙筆に盈つるのみ  
若徒炫耳目 もし徒らに耳目を炫(ま)さば  
視之有何益 之を視るも何の益か有らんや

(梅村 003)

吾詩非蹈襲 吾が詩は古風の  
古風三五七 三五七を踏襲するに非ず  
但擬寒山子 但だ寒山子に擬し  
積累歲月日 歲月日を積累するのみ  
觀者休錯會 觀る者よ錯りて会し  
閑書帙に等しく同じかるを休めよ  
言雖似逆耳 言は耳に逆ぶに似たりと雖も  
可以愈瘡疾 以て瘡疾を愈すべし(梅村 004)  
蔡善継が序で言っているように、梅村『擬寒山詩』に  
詩道は求められず、梅村自ら自序でも述べていたように、  
その詩は世人の病む「瘡疾」を癒すために、末法の世の  
人々に勧められるものであることが明示されている。

### 四

さて梅村は、像法禪定期の寒山を末法念仏(浄土往生)  
期の今(梅村の当世)に持ち出し、衆生の「瘡疾」の治  
癒(救済)に用立てるべく擬作したとする。そしてその  
「瘡疾」に対して薬となる「勸戒」の詩偈を提供する際、  
自序にあるように、寒山の「山居・賦事・詠物等」に擬

除却擬寒山 寒山に擬するを除却し

其餘総没幹 其餘は総て幹す没し(梅村 300)

たまたま薬となる言葉を見直していたら、これぞと集  
めた草稿の半分は無用となっていたと詠み、我が草稿を  
「擬寒山詩」以外に残していないことに喩える。蔡善継  
の序に「数千篇を下らない箇中の藁」のうちの「擬寒山  
詩」だけを梅村は敢えて上梓したと記していることと一  
致し、「擬寒山詩」だけは自ら進んで人に伝えようとして  
いたことが明記されている。

また、集の冒頭の詩(001)では、自らの『擬寒山詩』  
三百首を、それが恰も寒山が自らの詩偈を自負するよう  
な口調で、次のように捉えて見せる。

寒山三百篇 寒山の三百篇  
篇篇是警策 篇々は是れ警策なり  
或歌廊廡間 或は廊廡の間に歌ひ  
或書院宇壁 或は院宇の壁に書す  
當時國清寺 當時の国清寺  
僧行如雲集 僧の行くこと雲の集まるがごとし  
有耳胡不聞 耳有れば胡ぞ聞かざる  
有眼胡不識 眼有れば胡ぞ識らざる(梅村 001)  
それは「警策」としての意味があるとし、続けてさら  
に自らの『擬寒山詩』を、梅村は次のように位置づける。  
予擬寒山詩 予は擬す寒山詩  
亦是随口出 亦た是れ口に随ひて出づ  
也不期叶韻 また韻に叶ふを期せず

することをしたと言う。とりわけその「山居」詠が高い  
評価を得ていることは既述したが、それらを主題として  
詠む寒山の語彙や論理論法を真似た時に得られる力(他  
人性)を、梅村は(自らも含めた)衆生の薬として用  
いようとする。以下、幾つか例を挙げたい。

#### a. 山居の詠

梅村の「山居」詠は、寒山の最終的に至った山居の境  
地を真似ること得られる力を用い、自分の至った(治  
癒を得た)境地を詠んで見せる。  
例えば、寒山のある「天台」の石梁橋下には千丈の流  
れの瀑布が掛かっている、後、天台山の詩跡ともなるが、  
寒山詩はその詩跡内の棲心窟や定命橋(石梁橋)の担う  
意義について詠む。

迴聳霄漢外 迴かに聳ゆ霄漢の外  
雲裏路峒曉 雲裏路峒曉たり  
瀑布千丈流 瀑布千丈の流れ  
如鋪練一條 練一條を鋪くがごとし  
下有棲心窟 下には有り棲心窟  
横安定命橋 横さまに安んず定命橋  
英雄鎮世界 雄々として世界を鎮め  
天台名獨超 天台名独り超えたり(寒山 二六六)  
天台山の景勝は世界を鎮めると寒山は詠む。梅村も山居  
するに当たってそれを愛し、とりわけその石梁橋下の流  
れ(「五百流」)を愛し、次のように擬する。

愛殺天台山

愛殺す天台の山の

石梁橋下水

石梁橋下の水を

自古以及今

古へより以て今に及び

潺湲流不止

潺々として流れて止まず

人代有變遷

人の代には変遷有るも

水聲只如此

水声只だ此のごときのみ

好與五百流

好し五百流に与いて

洗得一雙耳

一双の耳を洗ひ得ん(梅村 二〇)

寒山には「今日歸寒山、枕流兼洗耳」の句があるが、梅村はそれをも踏まえつつ、先ずは原詩の「天台」「流」「下」「橋」「如」等の語彙を用い、「天台石梁」の水声が代々変わらず世界を鎮めている意味を、我が耳の汚れを洗ってくれるものと解し、擬している。原詩の風景は「像外の精神境界」であるとされる(錢學烈氏)。擬作も寒山のその境地に我が生活を類似させ、原詩に類似した論理を用い、我が耳の汚れ(瘡疾のもと)を洗う精神境界を獲得したとしている。

なおこの梅村『擬寒山詩』の擬作形式について付言しておく、二句一聯ごとに原詩とそっくりになるように類似語句を用いて順次言い換えて行くような型は採らず、原詩を構成する寒山詩中の二、三の語彙および原詩とほぼ同様の論理構造を用いて写し取る型を用いている。梅村『擬寒山詩』三百首は、概ねそのような擬し方をし、蔡善繼評にも「警醒世迷、發明大道、聲響意象、無非似寒山者。以無意於寒山、故能似寒山也」とあったように、

寒山を彷彿とさせ、あたかも原詩さながらの我が得た境地を描き出す模倣文学を作っている<sup>11)</sup>。

また例えば、寒山は白雲のかかる深山に於ける山居の「楽しみ」の妙諦を、次のように詠む。

自樂平生道

自ら平生の道を

煙蘿石洞間

煙蘿石洞の間に楽しむ

野情多放曠

野情は放曠なること多く

長伴白雲閑

長く白雲の閑けきを伴ふ

有路不通世

路あるも世に通ぜず

無心孰可攀

無心なれば孰か攀つべき

石牀孤夜坐

石牀孤り夜に坐すれば

圓月上寒山

円月寒山に上る(寒山 二二七)

寒岩につづく我が人生の道は、野趣にあふれ、俗世には通じず、人を呼び寄せることはない。梅村はこれに擬し、次のように詠む。

破屋覆煙蘿

破屋は煙蘿覆ひ

石牀苔蘚駁

石牀は苔蘚駁じる

雲光澗底明

雲光澗底に明るく

泉韻岳頭落

泉韻岳頭に落つ

山深忘歲年

山深くして歳年を忘れ

心懶醉丘壑

心懶くして丘壑に酔ふ

木食與艸衣

木食と艸衣と

自得其中樂

自ら其の中の樂しみを得たり

「樂」のほか、「山」「雲」「煙蘿」「石牀」「心」といつ(梅村 014)

た語彙を原詩と共通させつつ、原詩の論理論法に類似させ、深山は世俗とは通じず、山果山菜を食し、時の経つのを忘れる山居生活を自分は實際営んでいると詠み、それこそが寒山同様の楽しみでもあるとしている。

寒山はまた、商山四皓の「紫芝歌」を勸戒としながら、白雲のうちに山居している。

手筆太縱横

手筆太だ縦横

身材極魁偉

身材極めて魁偉

生爲有限身

生きては有限の身と為り

死作無名鬼

死しては無名の鬼と作る

自古如此多

古へより此のごとき多し

君今爭奈何

君今争奈何んせんや

可來白雲裏

来たるべし白雲の裏

教你紫芝歌

你に紫芝歌を教へん(寒山 〇一九)

「紫芝歌」の「莫莫高山、深谷逶迤。曄曄紫芝、可以療饑。唐虞世遠、吾將何歸。駟馬高蓋、其憂甚大。富貴之畏人、不如貧賤之肆志」を踏まえ、寒山は高山深谷への隠棲を勧め、他人に畏れを抱きながら富貴榮達を求めたところで、生死の前には何の意味も持たず、山居こそが憂いが無いとする。梅村はこれに擬し、次のように詠む。

獨倚斷崖石

独り倚る断崖の石

閑看孤雲飛

閑かに看る孤雲の飛ぶを

松風颯然來

松風颯然として来たり

吹我身上衣

我が身上的の衣を吹く

羣峯插霄漢

群峰霄漢を挿し

青天四邊垂

青天四辺に垂る

幽懷渺難言

幽懷は渺として言ひ難ければ

行行歌紫芝

行き行きて紫芝を歌はん(梅村 020)

顧みるべき我が「身」と寒山にかかる「雲」を原詩と共通させ、やはり原詩の論理論法を承けて「紫芝歌」を題材とし、寒山の教えに導かれて「白雲の裏」にやって来てみると、言葉にはし難い「幽懷」の境地が得られたと解釈してみせる。それは寒山が勧める「紫芝歌」中に在るものである。梅村も寒山同様に飢えを療す境地を得、我が志を肆ままする実生活を得ている。

禪理の基本である月と指と心との関係「指見月」も、

寒山は山居生活に於いて考えるよう促している。

巖前獨靜坐

巖前独り静かに坐せば

圓月當天耀

円月に当たりて耀く

萬象影現中

萬象の影中に現るるは

一輪本無照

一輪本より照らす無し

廓然神自清

廓然として神自ら清く

含虛洞玄妙

虚を含みて洞ろにして玄妙なり

因指見其月

指さすに因りて其の月を見れば

月是心樞要

月は是れ心の樞要なり(寒山 二七九)

森羅万象の影が月輪の中に映り込むのは、我が心そのものである「月」自体が鏡のように清虚(空)であるからであって、もとより月自体が光を放ち照らし出しているのではない、と寒山は詠む。月は寒山自身の心の喩えでもあるが、山居自体が禅でもあるその寒山詩を承け、

梅村は次のように擬する。

因指得見月 指さすに因りて其の月を見るも  
見月還忘指 月を見れば還た指を忘る  
認指以爲月 指を認めて以て月と為すは

斯亦愚人耳 斯れ亦た愚人なるのみ 「きも  
聞教合明心 教へを聞けば合に心を明らかにすべ  
明心教可已 心を明らかにすれば教へは已むべし  
執教以爲心 教へを執りて以て心と為さば

法眼生塵滓 法眼塵滓を生ぜん(梅村 257)

原詩を踏まえているとすれば、恐らくは机上ではなく、山居に在って月を指さす際の詠であろう。原詩の「清」を擬作は「明」で類似させ、月は心であり、指は教えであつて、心と教えとが別だと分かれれば、教えに執着して心の明鏡が塵にまみれることはない、と梅村は詠む。原詩の主旨を踏まえ、我あるいは衆生の生活に置き換え、禅理の基本に立ち返って警策している。自身および人々の瘡疾も、それで癒えであるうことを思っている。

以上、像法の世の寒山詩も、末法の世に於いて詠まれる場合は、教えのみならず生活面をも明確にする必要がある。梅村の「山居」生活は浄土と連なっている。末法の世の梅村自らが先ず寒山の「山居」を真似て見せ、我が得た浄土に於いて、自らの瘡疾を癒して見せている。

蔡善継の序では、梅村という「人」を見、その「意」を見るよう論評しているが、詩の出来映えではなく、龐公にも似、そこに表出される詩人の禅那生活に重点が置

かれるべきであるとするのは、梅村が「寒山詩」に擬した意味をそのような点に見出だしているからではないか。

#### b. 賦事・詠物などの詠

寒山像を捕捉しようとする擬作詩の模倣対象が、言葉のみならず詩人の実生活面の改善へと向かっていることが、梅村『擬寒山詩』(山居詠)からは窺える。すなわち梅村に於いては、「我が作る詩は寒山詩さながら」から、「我が生活は寒山子さながら」に、その手法が移っているかに思える。

例えば、寒山は「富兒」が如何に欲の程を知らないか、とりわけその選り好み(「揀」)の甚だしさを題材とし、警策すべく詠む。

富兒多鞅掌 富兒は鞅掌たること多く  
觸事難祇承 事に触れて祇だには承り難し  
倉米已赫赤 倉米已に赫赤たるに  
不貸人斗升 人に斗升をも貸さず

轉懷鉤距意 転た鉤距の意を懷き  
買絹先揀綾 絹を買へば先づ綾を揀ぶ  
若至臨終日 もし臨終の日に至らば  
弔客有蒼蠅 弔客には蒼蠅有らん(寒山 〇三七)

貪欲な「富兒」が臨終を迎えると、弔問に来るのは蠅だけだとなる。梅村は萬曆十五年(一五八七年)の大飢饉復興後にこれに擬し、原詩の「富兒」を福善の少ない「薄福人」(薄福少徳の人)で類似させ、さらに原詩が題材と

する「綾絹」を同じく原詩中に見える語彙「米」で類似させ、その贅沢を次のように詠んでいる。

丁亥歳大褫 丁亥の歳大いに褫あり  
飢民死多少 飢民死すること多少ぞ

剥盡樹上皮 剥ぎ尽くす樹上の皮  
糠也無處討 糠すらまた処として討ぬる無し

及今穀稍登 今に及んで穀稍や登れば  
就揀米堪好 就ち米の好きに堪ふるを揀ぶ

這等薄福人 這れら薄福の人  
終須作餓殍 終に須く餓殍と作るべし(梅村 190)

贅沢とは福徳が少ないことであり、米を選り好みする「薄福人」は臨終の際にも因果応報、餓死の報いがあると寒山と同様の論理論法で捉える。梅村は誰もが身をもって知ることとなった現実の飢饉を題材とし、浄土を求めない末法の世の「揀」という瘡疾を、我々自身のことであると衆生に知らしめようとしている。

「金籠の鸚鵡」すなわち籠の中の鳥を題材に採れば、寒山は人が自由を奪われる理由に喩え、次のように問題提起する。

鸚鵡宅西國 鸚鵡は西國を宅とするに  
虞羅捕得歸 虞羅捕へ得て帰る  
美人朝夕弄 美人朝夕に弄で  
出入在庭幃 出入して庭幃に在り  
賜以金籠貯 賜ふに金籠を以て貯へられ  
肩哉損羽衣 肩さるるかな羽衣を損なふ

不如鴻與鶴 如かず鴻と鶴と  
鵞鴈入雲飛 鵞鴈として雲に入りて飛ぶに  
隴西のオウムは、珍しいがゆえに豪華な籠の中の鳥とされ、窮屈にも閉じ込められて、羽を傷め飛べなくなる。これに擬し、梅村は次のように詠む。

鸚鵡巧能言 鸚鵡能言に巧みにして  
羽族最珍貴 羽族最も珍貴なり  
豪家爭市之 豪家争ひて之を市ひ  
貯諸金籠内 諸を金籠の内に貯ふ  
却顧枝頭鳥 却つて顧る枝頭の鳥の  
飛鳴得自遂 飛び鳴くこと自ら遂ぐるを得たるを  
嗟吾獨被羈 あゝ吾独り羈がれ  
飜受能言累 飜つて能言の累ひを受く(梅村 149)

オウムは、ただ一人能言なるがゆえに珍重され、籠の鳥となり、自由を奪われる。梅村は簡潔化してオウムの「能言」を前面に出し、しかし寒山と類似の論理を用い、末法の世の一般衆生の小賢しきは瘡疾であり、却つて徒らとなる(塵土での出来事)と警策する。原詩の「鴻、鶴」にも一般の「枝頭鳥」で類似させ、原詩の主旨を具体化した、「鴻、鶴」だけの話ではないとしている。

また寒山は、人に操られる「傀儡」を題材とし、人は甘い言葉によって操り人形にされ、疲労困憊で終わる、とその瘡疾を指摘する。

寒山出此語 寒山此の語を出だすも

此語無人信  
蜜甜足人嘗  
黃蘗苦難進  
順情生喜悅  
逆意多嗔恨  
但看木偶儡  
弄了一場困

此の語は人の信ずる無し  
蜜甜は人の嘗むるに足るも  
黄蘗は苦くして進め難し  
情に順へば喜悅を生じ  
意に逆らへば嗔恨多し  
但だ看るのみ木偶儡の  
弄して一場の困れに了るを

(寒山 二九〇)

この詩偈に關しては、梅村は「木偶」を用いつつも甘言への警策に限定せず、意味を広げて次のように擬する。

傀儡共登場  
呈盡千般伎  
謾將笑劇看  
世上總兒戲  
傍觀若自由  
未免線索繫  
舞罷寂然休  
與人死無異

傀儡と共に登場し  
呈し尽くす千般の伎  
謾りて笑劇を將つて看るも  
世上は総て兒戲なり  
傍らに觀れば自由なるがごときも  
未だ線索に繋がるるを免れず  
舞ひ罷はりて寂然として休めば  
人の死と異なる無し(梅村 015)

様々な技を繰り出す「木偶」の戯劇も、終わって冷めた目で見れば人の生涯そのもの、「線索繫」すなわち操り糸によつて操られている兒戲笑劇に過ぎない(それは塵土での出来事)とする。梅村は末法の世の人々を日頃の觀劇の場に連れ出し、人生が操り人形そのものであることを身をもつて分かるよう、寒山詩を捉え直して見せている。

人の心から財を奪う内通者とも言える耳目など六つの  
感覺器官「六賊」を題材に採れば、寒山は次のように詠む。

可笑五陰窟  
四蛇同共居  
黑暗無明燭  
三毒遞相驅  
伴黨六箇賊  
劫掠法財珠  
安泰湛如蘇

笑ふべし五陰窟  
四蛇同共に居る  
黑暗にして明燭無く  
三毒遞ひに相驅る  
伴黨す六箇の賊  
劫掠す法財の珠  
安泰なること湛として蘇るがごとし

(寒山 二七三)

「五陰窟」は色などに迷う人の心、「四蛇」は火などの害毒が盛る人の体を喩えると言うが、それらは貪、嗔、癡の「三毒」や耳目など「六賊」と結託し、心の宝を奪おうとする。梅村はこれを承け、次のように擬する。

六賊聚爲黨  
晝夜謀行劫  
一切功德財  
剽掠靡遺子  
内若無賊媒  
外寇何能入  
家賊最難防  
識得眞英傑  
「六賊」とは衆生の内心内部に巣くう「賊」(我が瘡疾)

六賊聚りて党を爲し  
晝夜謀りて劫しを行ふ  
一切の功德財  
剽掠せられて遺子も靡し  
内にもし賊の媒する無くば  
外寇何ぞ能く入らんや  
家賊は最も防ぎ難くして  
識り得たり眞の英傑を(梅村 194)

であると明言し、「外寇」と対で提示して、末法の世の人々がその魔軍と戦える英傑となるよう(浄土往生を求めよう)、原詩の主旨を簡潔化し解釈して見せている。

寒山はまた、人の「業」について、それをどのように修行するのか、金製と泥製の二瓶に喩えて提起する。

一瓶鑄金成  
一瓶埏泥出  
二瓶任君看  
那箇瓶牢實  
欲知瓶有二  
須知業非一  
將此驗生因

一瓶は金を鑄て成り  
一瓶は泥を埏て出だす  
二瓶は君が看るに任さん  
那箇れの瓶か牢実なる  
瓶に二つ有るを知らんと欲せば  
須く業は一つに非ざるを知るべし  
此れを將つて生因を驗すれば

修行は今日  
その身の業の「生因」が金製(善因)であるか泥製(悪因)であるか因つてその修行の在り方も決まるが、速やかに「修行」すればどちらの業も救われると詠む。この寒山の禪理に対しては、梅村は次のように擬する。

佛是渡海舟  
業如大小石  
業重能念佛  
石大仗舟力  
業輕不修行  
石小乏舟楫  
大石竟得渡  
小石飄成溺

仏は是れ海を渡るの舟  
業は大小の石のごとし  
業重きも能く念仏すれば  
石大なるも舟の力を仗らん  
業輕きも修行せざれば  
石小なるも舟の楫を乏しくせん  
大石は竟に渡るを得  
小石は飄つて溺るるを成さん

(梅村 145)  
寒山が金製泥製の二つの瓶に喩えた業因を、梅村は類似の論理論法によつて大小二つの石に喩え直し、たとい小石のような軽い石(業因)でも、運搬船(「仏」)、「念仏」という「修行」無しに直接海に浮かべるような事をすれば、救いは無い(瘡疾は酷くなり、浄土往生できない)と詠む。寒山が「修行」とだけ言つた所を、梅村は末法の衆生に有りがちな実態に即し、「修行」のうちの「念仏」をとりわけ勧めようとする。寒山の主旨に沿いつつ、自説を前面に出し、人々に警策を加えている。

## 五

さて、冒頭に挙げた沈季友『構李詩繫』所収の梅村「和山居詩」(擬寒山『山居』詩)二首(009と101)も、擬作である以上は原詩があり、それと相俟つて読みがなされるべきであろう<sup>[註]</sup>。

梅村の009は「童子」が「茶」をもちたらず詠になつて  
いるが、寒山詩の中に「茶」の詠は無い。「童子」詠も一  
首しかなく(寒山詩 一一七)、それをこの詠の原詩と考  
えるには類似点が無い。「泉」も、寒山詩は殆どが「黄泉」  
であるが、ただ一首「泉」詠がある(寒山詩 〇七八)。  
それは「居」の在り方が提起され、次のように詠む。

天台更莫言  
猿啼谿霧冷

天台更に言ふ莫し  
猿は啼きて谿霧冷やかに

嶽色草門連 嶽は色づきて草門連なる  
竹葉覆松室 竹葉は松室を覆ひ  
開池引澗泉 池を開きて澗泉を引く  
已甘休萬事 已に万事を休むるに甘んずれば  
採蕨度殘年 蕨を採りて殘年を度る(寒山〇七八)  
梅村はこの「居」の詠に擬している。

遁居霞霧峰 遁居す霞霧の峰  
千山萬山裏 千山萬山の裏に  
白雲傍榻飛 白雲は榻に傍つて飛び  
草閣依巖起 草閣は巖に依つて起つ  
閑臥擁鹿裘 閑臥して鹿裘を擁き  
清談揮塵尾 清談して塵尾を揮ふ  
童子採茶歸 童子茶を採つて帰れば

自去汲泉水 自ら去きて泉水を汲む(梅村〇〇9)  
寒山の題材とした「幽居」を梅村は「遁居」という語彙で類似させている。両者ともに「霧」のかかる山中に身を置き、「草」の庵の近くには「泉」が引いてある。ここで寒山は「蕨を採る」生活、梅村は「茶を採る」生活を、それぞれ営んでいる。梅村は「蕨」に「茶」で類似させ、それを以て寒山の「休息萬事」の心境に自らも在ることを言う。寒山と類似の論理を構築し、類似の境地に至ることで、梅村自身の生活上の瘡疾は癒されることになる。その際、寒山の「山居」詠の「幽居」と梅村「遁居」とでは、人を閑適に置く点は類似するものの、「蕨」と梅村の「茶」とでは、両者に差異が感じられなくもない。

わち「四庫未收書輯刊」第六輯第二七冊所収の張梅村(守約)『擬寒山詩』一卷(三百首)の編次に順い、その詩に001～300の番号を付し、示すものとする。

[2]明、釋正勉ら『古今禪藻集』にも、寒山の詩偈は「山居」、「山居雜詩」と題して採られている。

[3]慈受和尚「擬寒山詩」に関しては、『中国中世文学研究』第五十九号(二〇一一年)を参照されたい。なお、陳曦「慈受懷深禪師廣祿」(上海古籍出版社「雲門宗叢書」二〇一五年)は「擬寒山詩二十首」、「擬寒山詩一首」と「重刻擬寒山詩」序を採録するが、慈受和尚の「擬寒山詩」の全体は載せない。

[4]序は他に同時代の文人居士である湖州府烏程のひと唐守礼の寄せる「梅村先生擬寒山詩序」もある。

[5]下東波氏は、この蔡善継序の冒頭の「寒山詩非詩也。無意於詩而似詩、故謂之寒山詩。」を「寒山雖無意爲詩、但詩中蘊含的人生與社會哲理却一直耐人尋味、值得世人仔細涵詠。」と解している。(「寒山詩日本古注本叢刊」二〇一七年、南京鳳凰出版社)。

[6]「副墨の子」は、言葉伝えるための墨により副う子や孫、すなわち文字。『莊子』大宗師「聞諸副墨之子」を典故とする、禪の悟りへの一段階をいう。

[7]龐蘊の「二乗」については、入矢義高『龐居士語録』(一九七三年、筑摩書房「禪の語録7」)「二乗の宗義問答」に詳しい。なお、龐蘊の伝は宋の釋普濟『五燈會元』卷三、「景德傳燈録」卷八などに見える。また「龐蘊詩集」は、宋代以降、歐陽修ら『新唐書』藝文志にも「……寒山子詩七卷、龐蘊詩

それは梅村が寒山を意としなかつたかにも見える。しかしそれは、両者の実生活の差異を反映するものと見たい。模倣である以上は、両者の主旨に差異は無いのではないか。「蕨」であれ仏儀の「茶」であれ、両者ともに万事休息できる。それが梅村が寒山の山居生活に擬することにより得た衆生の一人としての瘡疾治癒の境地であり、それで模倣文学としての成立を図っている。

また、梅村が「鹿裘」を着けていると詠んでいるのも、孔子に賢者と言われた榮啓期の三樂(貧を常とし、人、男、長寿であること)を以て自らの楽しみとしていることを言い、寒山の山居生活に浴おうとしていると見たい。寒山を意としないかに見える、それでも寒山に似せようとすする思いは窺えよう。

以上、梅村『擬寒山詩』は、寒山の提示する主題を承け、寒山の原詩に見られる二、三の語彙あるいは類義語彙を用い、さらに原詩の論理論法に類似させつつ、龐老にも似るとされる自らの親しむ「禪棲」(実生活)を具体的に詠み込む形で、寒山に「追擬」していると考えられる。それは一見、寒山を意としないかにも見えるが、模倣の意は十分働いている。梅村はそのような擬作形式を採ることににより、当世の人々(および自ら)の瘡疾の実態を捉え、その治癒をも試みたものと考えられる。

#### 注

[1]以下、整理および論述の都合上、張守約「和寒山詩」すな

偈三卷……とある等、寒山と併称され採録されることが多い。

[8]マイケル・タウシグは『模倣と他者性』(井村俊義訳、二〇一八年、水声社)に於いて植民地的模倣を論じ、被植民地の呪術師が他文明の表象のイメージを呪術に取り込むことによって治療を行なうことを、「模倣の能力」に拠るとしている。梅村も、寒山という「他者」の「山居、賦事、詠物」等のイメージを自らの詩偈に取り込み、それを衆生あるいは自らを治癒する模倣の力として用立てようとする。

[9]寒山詩の編次の番号は、錢學烈『寒山拾得詩校評』(一九九八年、天津古籍出版社)および項楚『寒山詩注』(二〇〇〇年、北京中華書局)による。〇〇一〜、以下同じ。

[10]前例としては庾信の「擬詠懷」詩がある。『中国中世文学研究』第六十一号(二〇一二年)を参照されたい。

[11]ここで列挙する具体例以外にも、梅村『擬寒山詩』044、038、099、148、……は、それぞれ『寒山詩』二二四、二〇八、一六二、〇五六、……を原詩とし、また梅村『擬寒山詩』139は『拾得詩』拾一八を原詩としている等、数多くの対応関係を指摘できるが、紙幅の都合上、ここではこれ以上の列挙を省略したい。

[12]二首のうちの一、梅村10は、「無人」を題材にしている。それは寒山詩の、二七八、〇〇四、或いは〇三一に似るが、これらはいずれも詩の構成は類似するものの、原詩として特定されるための決め手を欠く。別の擬作形式の可能性も含め、更なる考察を要するものとし、ここでは論及を措きたい。